

2024年度（令和6年度）

浦和明の星女子中学校入学試験問題  
（第一回）

国語

（50分）

注 意

1. 試験の開始まで問題用紙を開かないこと。
2. 問題用紙は全部で11ページある。試験開始と同時にページ数を確認すること。
3. 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきり書くこと。なお、解答用紙の※印欄のところは記入しないこと。
4. 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書くこと。
5. 印刷のはっきりしないところがある場合は、手をあげて係の先生にきくこと。
6. 字数制限のある場合は、句読点も一字と数えて答えること。

受験番号

--

① 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の話の意味です。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

私がとても好きな研究者に、シェリー・タークルというMIT（マサチューセッツ工科大学）の心理学者がいるのですが、彼女は2011年に出された本で興味深いエピソードを紹介しています。

〈中略〉

携帯電話が急速に普及した当時、対面での会話を保留して、モバイル端末で「ここにいない人間」の対応を優先することに当時の人は驚愕し、戸惑っていたということでした。もうすっかり忘れて久しい感覚かもしれません。

タークルが警戒心を示すのは、画面の向こう側のやりとりや刺激を優先して、対面の関係性や会話を保留するという新しい行動様式をモバイル端末が可能にしたことです。家で映画を観ていても、誰かと会ったり話したりしていても、テキストや電話、動画やスタンプ、ゲームやその他の様々な何かで中断してしまおう。

つまり、複数のタスク（マルチタスク）と並行して、対面でのやりとりや行動を処理することに現代人は慣れてしまったのです。あるいは、対面・現実の活動も、「マルチタスクキング」の一つとして組み込まれてしまおうと言うべきでしょうか。①並行処理すべきタスクの一つとして、現実の会話を捉える習慣がここにはありません。

② 物理的にある場所においても、実際には別のところにいることは珍しくありません。信号待ちをしたり、スーパーのレジを待ったり、会議に出席していたりするとき、興味を惹くものがなくて退屈するなら、私たちはスマホを焦ったように取り出して、音楽を聴き、SNSを開き、誰かにテキストを送り、動画や記事をシェアしています。

〈中略〉

持ち歩けるデバイスを使って、ここではないどこかで別の情報を得たり、別のコミュニケーションに参加したりすることが可能になった状況を、タークルは「常時接続の世界」と呼びました。スマホ時代の哲学のキーワードは、「常時接続」です。常時接続の世界において生活をマルチタスクで取り囲んだ結果、何一つ集中していない希薄な状態について、特に人間関係の希薄さを念頭に「A」と彼女は表現しています。

話でした。「孤立」は、注意を分散させず、一つのことに集中する力に関係するのに対して、「孤独」は、自分自身と対話する力に関わっています。

やはりタークルが、印象深い事例を挙げているので、これを手がかりにしましょう。

先日、仲がよかった友人の追悼式に出席したとき、プログラムが書かれたクリーム色のカードが用意されていた。そこには弔辞を述べる人の名前、音楽を演奏する人の名前や曲名、そして若く美しかったころの友人の写真が載っていた。私のまわりの何人かは、そのプログラムで携帯電話を隠し、式のあいだにテキストを送っていた。

その中の一人、60代後半とおぼしき女性が、式のあと私のそばに来て、当たり前のような口調で「あんな長い時間、電話なしで座っているなんて無理ね」と言った。式の目的は、時間をとってその人に思いをさせることではないのか。この女性は、手にして10年にも満たないテクノロジーのせいでも、それができなくなっているのだ。

〈中略〉

ここで失われ（かけてい）たものが、「孤独」です。退屈に耐えきれず、何か刺激やコミュニケーションを求めてしまう。自分自身と過ごすことができないうことです。「孤独」という言葉を通して、刺激を求めたり他者への反応を優先したりすることなく、自分一人で時間を過ごすことの重要性が語られているわけですね。

④ ただし、「孤独」といっても、これは「自分自身と過ごすこと」をフラットに指す言葉なので、否定的な含みがないことに留意する必要があります。そうはいっても、悪い印象を持つてしまう人も多いでしょう。その疑問を払拭するためにも、どうして「孤独」が必要なのかという問いに、ハンナ・アーレントという哲学者の想像力を借りて迫ってみたいと思います。

アーレントは、「一人であること」を三つの様式に分けています。それが、⑤「孤立 (isolation)」、⑥「孤独 (solitude)」、⑦「寂しさ (loneliness)」です。この補助線を引けば、多少見通しがよくなり、「孤独」と「孤立」の関係も見えてきます。順に見ていきましょう。

アーレントは、他の人とのつながりが断られた状態を「孤立」と呼びました。言い換えると、「孤立」は、何らかのことを成し遂げるために必要な、誰にも邪魔されずにいる状態を指しています。創造的・生産的なことでなくても、何かに集中し

③ メディア論では、「人の感覚がテクノロジーによって書き換えられていく」という考え方をすることがよくあります。「技術は中立的なものだ」と語る人がたまにいますが、これは実状に反しています。実際には、新たなテクノロジーは普及するにつれて、行動様式、感じ方や捉え方、ものの見方を具体的に変えていくのです。技術が感性のあり方を左右していくのだとすれば、スマホを手にした私たちはどう変わってしまったのでしょうか。問題点について考えるわけなので、この変化によって失われたものにフォーカスしてみよう。技術について考える中で、私たちは原理的な問い、平たく言えば「そもそも論」に巻き込まれていくとタークルは言います。「私たちは本当に重要なものは何かという疑問に立ち返っていく」ことになるのだと。スマホの先にある「本当に重要なもの」とは何でしょうか。

常時接続の世界で失われたもの。いろいろな論者の見解を私なりに整理して総合するなら、それは二つの観点から説明できます。それは、「孤立」と「孤独」です。それぞれについて言い換えれば、他者から切り離されて何かに集中している状態と、自分自身と対話している状態のことです。

常時接続の世界の行動について立ち止まって考えればわかることですが、私たちは、B「なコミュニケーションを積み重ねています。いろいろなものを保留しながら、短いテキストやアクションでC」な返答を「ジュンジ」していく。

例えば、こんな光景はありふれたものでしょう。対面で誰かと話しているときに、スタンプと短いテキストで4人に「👍」を返し、フリマアプリが表示してくるお知らせをスルーして、早送り機能でソシヤゲ「ゲームの一種」のストーリーを進め、Twitterでいくつかの記事を熟読せずにリツイートし、Instagramで気に入ったインフルエンサーの薦める服を保存しておく。

ここで失われているのが「孤立」です。何か一つのことに取り組み、それに集中するにはあまりに気が散っていて、いろいろなコミュニケーションや感覚刺激の多様性が、一つのこと没頭することを妨げてしまっています。

〈中略〉

いろいろな事柄や相手に注意が分散しているわけですから、対面での会話が作業するようにこなされてしまうのは当然です。反射的なコミュニケーションで自分を取り巻くことは、相手の人格や心理状態を想像しないようにと日夜練習を積み重ねているようなものです。マルチタスク化した生活がもたらす「孤立」の喪失は、なかなか問題がありそうです。

常時接続の世界では、「孤立」だけでなく「孤独」もまた失われつつあるという

て取り組むためには誰かが介在してはなりません。例えば「何かを学んだり、一冊の書物を読んだりする」ときなどに、「他の人の存在から守られていることが必要になる」ように。

要するに、何かに集中して取り組むために、一定程度以上求められるのが、この物理的な隔絶状態です。この意味で、「孤立」は、何かに集中的に注意を向けるための条件になっていることがわかります。

それに対して「孤独」は「沈黙の内に自らとともにあるという存在のあり方」と説明されます。ちよっとおしゃやれな言い方でニュアンスを酌みくいとありますが、「孤独」にあるときの私たちは、心静かに自分自身と対話するように「思考」しているということです。「孤独」とは、私が自分自身と対話するように「思考」していることについて、自らと対話する」という「思考」を実現するものなのです。葬式の最中にデジタルデバイスを触りたがる老女は、悲しみを受け止める場を退屈に感じ、「沈黙の内に自らとともにある」ことができなくなりました。しかし、人から話しかけられたり、余計な刺激が入ったりすると、自己との対話（＝思考）は中断されてしまいます。この意味で「孤立」は、「孤独」とそれに伴う自己対話のための必要条件にはなりません。「孤立」抜きに「孤独」は得られないということなのです。

より興味深いのは、「一人であること」の三様式の残りの一つである「寂しさ」です。アーレントは、「孤独」と「寂しさ」を区別するとき、「孤独」が「孤立」（＝一人でいること）を必要とするのに対して、「寂しさ」は、「他の人々と一緒にいるときに最もはつきりあらわれてくる」と述べています。

「寂しさ」は、いろいろな人に囲まれているはずなのに、自分はたった一人だと感じていて、そんな自分を抱えきれずに他者を依存的に求めてしまう状態です。どうにも不安で、仕事が虚しくて、友人や家族とうまくいかないのが苦しくて、誰にも理解されない感覚があつて、退屈を抱えきれなくて他者や刺激を求めてしまう。これに心当たりがない人は恐らくいませんよね。

実際、「寂しさ」は旧来的な共同体が崩壊した都市社会に生きる現代人に、宿業「避けては通れないこと」のようにのしかかるものだと言っています。私たちがみな、どこにいてもアットホームな気持ちになれない余所者（故郷喪失者）のような心理になる素質を持っており、その気持ちを忘れるために、何かや誰かと一緒にいたいと望む寂しがり屋なのです。

スマホという新しいメディアは、「寂しさ」からくる「つながりたい」「退屈を埋めたい」などというニーズにうまく応答してくれます。スマホは、いつでもどこ

でも使えるだけでなく、スマホを含む様々な情報技術が、私たちのタスクを複数化し、並行処理を可能にしています。コミュニケーションも娯楽もその他の刺激も流し込み、自己対話を止めて感覚刺激の渦に巻き込んでくれるマルチタスクは、つながりへの欲望も、退屈や不安も覆い隠してくれます。

しかし、〈寂しさ〉からくるマルチタスクは、いろいろな刺激のダンペンを矢継ぎ早に与えるものなので、一つ一つのタスクへの没頭がありません。そうすると、ふとした瞬間に立ち止まったとき、「あれは何だったんだ」と虚しくなったり、つながりの希薄さ（つながっていない一人ぼっち）を実感したりすることになります。

⑥ 常時接続が可能になったスマホ時代において、〈孤立〉は腐食し、それゆえに〈孤独〉も奪われる一方で、〈寂しさ〉が加速してしまうにもかかわらず、私たちはそうした存在の危うさに気づいていないように思えます。これまで論じてきた問題点に、スマホというメディアの特性を重ねると、〈寂しさ〉という問題が前景化してくるということです。

（谷川嘉浩 著『スマホ時代の哲学——失われた孤独をめぐる冒険』より）

問1 太線部a「ジュンジ」・b「ダンペン」のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線部①中の「並行処理すべきタスクの一つとして、現実の会話を捉える」の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 目の前の相手との会話や活動を保留して通話やゲームをすることは、通話やゲームを中断して目の前の相手との会話や活動を優先することと同じくらい気軽なものだと考えること。

イ 複数の人と対面して会話や活動をする際、優先順位をつけずに同時に対応することは、現代人のコミュニケーションには欠かせない能力になっていると思われること。

ウ 現実に対面している相手とのコミュニケーションも仕事の一つであり、効率を上げるためにスマホを用いる他の作業と同時に進むべきだと考えるようになったということ。

エ 目の前の相手と会話をするには、誰かにテキストを送ったり、通話をしたり、ゲームをしたりすると同時に進行することができる作業であると考えているということ。

問7 次は、傍線部④「ただし、〈孤独〉」留意する必要があります」と作者が述べる理由について説明した文です。空欄に入る最も適切な表現を、I・IIは傍線部④以降の本文中から指定の字数で抜き出して答え、IIIは後のア〜エから選んで記号で答えなさい。

「自分自身と過ごすこと」とは、**I**（4字）をすることであり、**II**（11字）状態を必要とするが、その状態を「孤独」と言い換えてしまうと、「III」から自分一人だけで過ごす」という否定的なニュアンスでとらえがちになるから。

ア 一緒にいたい人がいない

イ 誰もそばにいない方がいい

ウ 一緒にいてくれる人がいない

エ 誰がそばにいても変わらない

問8 次の1〜4の状況について、傍線部⑤における「孤立」であるならA、「孤独」であるならB、「寂しさ」であるならCをそれぞれ答えなさい。

1 夏休みに友達と一緒に図書館へ行ったが、自習室のブースで解散し、それぞれ自分の課題に静かに取り組んだ。

2 友人たちと服を買いに来たが、自分だけ好みが違うため遠慮して行きたいお店を言い出せず、好みが同じ友人のSNSをスマホで眺めていた。

3 放課後に教室で小説を読んでいて、主人公の気持ちが分からず、一度本を置いて自分の経験と照らし合わせながらよく考えてみた。

4 好きな漫画を原作とした映画を観に行こうと友人に誘われたが、じつくりと観たかったので、誘いを断って一人で映画館へ行った。

問9 傍線部⑥「常時接続が可能になった」〈寂しさ〉が加速してしまう」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア スマホを使うことによって他者との関係を断つことが難しくなると、本来自分がかかったことに没入することができなくなり、一人でいることへの心細さが生まれてしまうから。

イ スマホを用いて常に誰かと連絡を取り続けることで、それらの多くの他者の存在によって自分が守られていることを実感し、その居心地の良さから抜け出せなくなってしまうから。

問3 傍線部②「物理的に」別のところにいる」の具体例として適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 信号待ちをしているときに、信号が変わるまでの時間が待ちきれなくて、スマホで動画を観る。

イ スーパーで買い物をしているときに、リゾート気分を味わいたくて、モバイル端末で音楽を聴く。

ウ 会議のときに、必要な資料を印刷し忘れ、パソコンでデータを探してその場のメンバーに送信する。

エ 家で映画を観ているときに、出演している俳優や撮影場所の情報が気になり、スマホで検索する。

問4 空欄Aに入る表現として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一つのことには没頭できない私

イ つながっていても一人ぼっち

ウ 帰る場所がなくなった余所者

エ 他者から切り離された私たち

問5 傍線部③「人の感覚がテクノロジーによって書き換えられていく」例として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 簡単に最新の情報を得られる機器を用いて、常に必要な情報を更新しながら生活できるようになり、変化に敏感になった。

イ スマホの登場により、表現や言葉の調子から目の前の相手の感情を繊細に読み取る必要がなくなり、それらに鈍感になった。

ウ 人との交流の場がかつては非常識と認識されていた行動も、便利な道具が発達したことで、当たり前に行われるようになった。

エ かつては手作業で行っていたり作られたりしていたものが、機械によって大量生産され、伝統的な手法が忘れ去られていった。

問6 空欄B・Cに入る語として最も適切なものを選択肢からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

B……ア 意識的

イ 反動的

ウ 一方的

エ 間接的

C……ア 客観的

イ 表面的

ウ 具体的

エ 個別的

ウ スマホは「つながりたい」という欲求を満たし退屈を紛らわしてくれるが、与えられた多量の刺激によって感覚が正常でなくなり、いつしか自分の行動に意味を見出せなくなるから。

エ スマホによって刺激が与えられ続けて注意が分散されてしまうと、一つひとつのことを心静かに思考することができなくなり、何に対してもつながりが薄いことを実感してしまうから。

問10 次は、本文を読んだ明子さんと星子さんの会話です。空欄に入る最も適切な表現を答えなさい。ただし、I・IIは1ページ下段以降の本文中から抜き出し、X・Yは自分で考え、それぞれ指定の字数で答えなさい。

明子 私にとってスマホはあるのが当たり前だから、スマホという**I**（2字）によって便利になっただけじゃなく考え方も変わったなんて驚いたな。

星子 本当ね。身近だからかもしれないけど、電車内で友達同士並んで座っても会話をせずにそれぞれスマホをいじってるのを見ると、友達ってなんだろうって考えさせられるわ。

明子 それって、本文でいつていた「人間関係の希薄さ」の具体例だよな。一人でいることに耐えられずスマホや友達に依存してしまうけど、それでは十分なコミュニケーションが取れないから満足できなくて、でも他に手段がないから依存することが止められない。**X**（ひらがな4字）**Y**（ひらがな4字）**Z**（ひらがな4字）

星子 夢中になれるものがスマホしかないのがまずいんだよな。そこから抜けられる方法ってないのかな。

明子 そうね。それは〈孤立〉を取り戻すってことかしら。物理的に離れているだけじゃなくて、目には見えない**II**（4字）も断ち切る必要があるよね。

星子 つまり、それって他のことに気を散らさずに一人で没頭できる**III**（ひらがな3字）を持ってってことなのかな。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

凛子は中学二年の夏、両親と妹の爽子と海の近くの町に引っ越してきた。転入した学校では必死に新たな友人関係を築こうとしていたが、クラスでは誰かからかって楽しむような雰囲気があり、それに凛子は違和感をおぼえていた。自分に気を遣ってくれていた和久井くんと仲をクラスメイトにからかわれ、凛子は思わず「人をバカにしてそんなに楽しい？」という言葉を書き、周囲から距離を置かれてしまう。

あきらめてしまえば、思った以上に私の日々は穏やかにいった。しばらくのあいだ、美緒ちゃんたちは気を遣って声をかけてきてくれた。けれど、休み時間や昼休みに距離を置くようにしたら、あつという間にみんな必要以上に話しかけてこなくなった。

タイミングもよかったと思う。すぐにテスト期間に突入し、三時間目が終われば帰宅だ。そのおかげで、ひとりでお弁当を食べる気まずさを感じなくて済んだ。ひとりで学校に行き、テストを受けて、帰る。

そして、平常運転に戻っても、なんとなく私はひとりであることが当たり前になつた。

転入してきてから、必死になってみんなと仲良くしなければ、この関係を維持しなければ、と気を張って振る舞っていた。最初に話をするようになったのが文乃ちゃんたちだった、というのはただのラッキーだったけれど、私なりに努力はしたつもりだ。

でも、その日々は、たった一日ですべて無駄になった。

手に入れるのは難しいのに、失うのは一瞬だ。

けれどそのかわりに、私が望んでいた、静かな毎日が訪れた。

「寒いだけが問題だなあ……」

肩をすくめてお弁当を広げる。

さすがに、教室でお昼を食べるのは気が引けた。

教室で私がひとりきりでいると、クラスのみんなに気を遣わせてしまう。それに、他のクラスの誰かに、転入生が孤立していると勘違いされて、いらぬウワサが駆け巡ってしまうかもしれない。

どうしたらいいかと悩んだ末にたどり着いたのが、和久井くんに教えてもらったこの場所だった。まさか、こんな形で役立つことになるとは思っていなかった。

同じことを繰り返している。

だから——私は両親に、友だちがいるフリをしなくちゃいけない。

でも、今の私が、本来の私だ。

ひとりであることを、私が選んだ。

勝手に心配して、気を遣ってくる両親にやるせない気持ちになったこともある。友だちを作るために無理をしている私に気づかないどころか、笑っている。上辺だけの私を見て安堵する姿に、怒りを覚えたことだってあった。

それなのに、どうしてこんなに申し訳ない気持ちになるんだろう。今ここに私の視界には、誰の姿も映らない。

それは、誰の視界にも私の姿は映っていないということだ。

いないのと、おなじ。

なんで私は、ここに、この町に、いるんだろう。

このむなしさは、疎外感、なんなんだろう。

この世に私ひとりしか存在しないみたいにしてしまう。

そのほうがいいと思っていたはずなのに。私以外誰もいなければいいのにと考えるときもあったのに。

④ 沈んでいく。気持ちだが、私が——世界が。

こんな気持ち、この町に来るまで知らなかった。

ひとりに慣れてきたから気にしたことなかった。みんなの笑い声に違和感を抱いたこともなかったし、誰かに自分の意見をぶつけ、怒らせたこともなかった。

友だちを作ろうとしなければ、こんなモヤモヤした気持ちは知らないままでいられたのに。

そして同時に、自分がいかにひとと接することに向いていないのかがわかった。

だからもう、友だちなんかいらぬ。

私はこれからずっと、ひとりでもいい。

口の中にあるご飯から、味が消えていく。

へ 中略2

「爽子も凛子も、この町でたくさん友だちができてよかった」

お母さんがしみじみと呟いた。そして視線を私に向けて微笑む。

心臓がえぐるような痛みを隠して、口角を必死に持ち上げた。

夕食の時間、ずっと自分をウソでコーティングしていたから、どっと疲れてしまった。居心地も悪いから、ご飯の味なんてちっともわからない。

外に面しているこの階段は、十月も終わろうかという今の季節、日があまり当たらないこともあり、寒い。真冬になったら耐えられないだろう。それまでに別の場所を探しておかなくちゃなあ。屋内で誰にも見つからないところなんてあるのだろうか。① 誰もいないとも誰かと一緒にいたときは、こんな悩みは一度も抱かなかった。

それでも、ひとりでいることはやっぱり、楽だと思ふ。

朝、決まった時間に家を出なくちゃ、と妙に焦ることもないし、興味の無い音楽やドラマを調べる必要がない。放課後は好きな本を読んで、好きな映画を観ることができる。

誰かに合わせるができない。

自分の時間を、自由に使うことができています。

ただ、少しだけ② 手持ちのな感覚を抱くのは、突然日常が変化したからだ。

いつもそばにいた誰かがいないことに、ちよつと違和感を覚えるだけのこと。

へ 中略1

お母さんはいつも、お弁当に私や爽子の好きなものを入れてくれる。

この町に引っ越してくる前は仕事をしていながら、作り置きしていたおかずがよく入っていたけれど、今は毎朝キッチンで作ってくれているのを知っている。最近クリーニング店でパートの仕事をはじめたけれど、以前よりも楽だから、と料理に凝り出すようになった。

魚料理を減多にお弁当に使わないのは、爽子のためだ。

③ 最近はお晩ご飯にもあまり魚は出なくなった。爽子が魚がきらいだと言ったから。本当はきらいじゃないと知っているのに。

お母さんは、なにを思ってた私たちのためのお弁当を作ってくれているのだろう。

きつと、この町でできた友だちと一緒にいる私たちの姿を想像しているに違いない。

爽子はおそらく、誰かと一緒にいるだろう。

けれど、私はここでもひとりである。

まさか、こんな人目を避けた日も当たらない場所でお弁当を食べているとは思っていないはずだ。

知つたらきつと、ショックを受けるだろうなあ。

私のために、爽子がいやがるのもわかつたうで引越を決断したのに、私は

食器を流しに運び、部屋に戻るため階段をあがる。

ああ、体が鉛みたいにな

ここ最近、学校よりも家にいるほうが疲労する。今までは学校で自分を取り繕っていたけれど、今は家族の前で取り繕わなくてはいけないからだろう。

隠さないといけないほど、私は悪いことをしているのかな。

体内にチリのようなものが蓄積されていく。

「お姉ちゃん」

階段をのぼったところで、うしろにいた爽子が私を呼ぶ。

爽子に声をかけられるのは久しぶりだろう。

「どうしたの」

と振り返ると、爽子の鋭い視線に体がきゅつと萎縮した。

感情表現が豊かな爽子は、怒っているときもまっすぐに私を見つめてくる。私よりも年下で、身長も私よりも低い。まだ小学生で、ランドセルを背負っている姿は子どもでしかない。

なのに、圧倒されるほどの恐怖を感じる。

「もう、やめてよね」

「……なに、が？」

「お姉ちゃんのせいであたしまで引越すハメになって、友だちとも別れることになったんだよ。いい加減、ちゃんとしてよ」

ぐつと声を抑えた言い方だったけれど、怒鳴られているくらいの迫力があつた。

「最近、またひとりであるでしょ」

いつの間にか俯いていたけれど、思わず弾かれたように顔を上げてしまう。

「な、なんで」

「あたしだって友だちとこの辺で遊んでるんだから。お姉ちゃんがひとりであらしてるとこくらい何度も見かけるもん」

私が爽子を見かけたように、爽子も私を見かけていた。考えれば当然のことだ。

いつ、どんな姿を見られたのだろう。

もしかして——ウワサも耳にしているかもしれない。

ウンがばれてしまった後ろめたさと恥ずかしさで、顔が赤くなる。

「なんでお姉ちゃんは、誰とも仲良くならないの？ なれないの？」

べしつと額に烙印を押されたような衝撃に、体がふらつきそうになる。

誰とも仲良くない

友だちがいけないというのは、そういうことなんだ。

「お姉ちゃんは平気かもしれないけど……」  
爽子は唇を噛んで、言葉を呑み込むように黙る。そして、それ以上なにも言わず目をそらして私の横を通り過ぎた。自分の部屋に入り、普段よりも大きな音をたててドアを閉める。

私は、<sup>⑤</sup>廊下で足をすくめて立っていた。

どのくらいのあいだそのままだったのかわからないけれど、しばらくしてからふらりとおぼつかない足取りで自室に入る。

ドアにもたれかかり、は、と息を吐き出す。ずるずると体が重力に逆らえず下がってしまい、べたりと床に座り込む。

じっと床を見つめていると、<sup>⑥</sup>目頭が熱くなってきた。

視界がじわりとかすんでくる。

——どうして私は、爽子のように誰かと親しい関係を築けないのだろう。

誰かが私を攻撃してくれたら、もっとわかりやすく、私は傷つくことができた。

友だちがいないことを誰かに悪しざまに責められたら泣けたかもしれない。友だちだと思った人にいじめられたら、周囲に救いを求めることもできただろう。

でも、どちらでもない。

それは、とても幸運なことだとわかっている。今現在、そういう立場で苦しんでいる人たちがいるのもわかっている。

私の悩みは贅沢で、ワガママで、自分勝手だ。

だって、誰も悪くない。

今のクラスメイトたちはみんな、転入してきた私にやさしく接してくれた。両親はいつだって私を心配してくれている。妹は、私の被害者で、けれどここでも自分の居場所を作ろうと毎日を過ごしている。

噛み合わない。私ひとり、上手に生きられない。

耳を塞いで、ぎゅゅと瞼を閉じる。

唇に歯を立てて、鼻で息をする。

こうしていれば、自分が守られるような気がした。

へ 中略3 凜子が家に帰ると、爽子は友だちとおそろいのマフラーを編もうとして母親に教わりながら練習をしていた。〜

「せっかくだし凜子もなにか編む？」

なんとなしに袋に入っていた毛糸を一玉手に取って見ていると、お母さんに聞かれた。

「海を眺めるのが好きなんだだよ。それに、派手な子はただの、クラスメイトだよ」  
生唾を呑み込み、ゆっくりと言葉を吐き出した。声が出なかつたらどうしようかと思っていたからか、やたらとはつきりとしやべってしまった気がする。

「だから、大丈夫だよ」

なにが大丈夫なのか。

自分で自分に問いかけるけれど、答えは出てこない。

「凜子はいつも大丈夫って言うけど、本当なの？」

お母さんは眉を下げる。

「大丈夫」

口にするたびに、声が震えていく。

視界が滲んでいく。

なにも、見えなくなる。

真つ暗な視界の先に、明るい髪の毛の和久井くんが眩しく蘇った。

手をのばしたい。近づきたい。私は、ここから踏み出したい。

彼のようにになりたいわけじゃない。ただ、気持ちはずつと立ち止まっているから、私の気持ちがこの場所から動けないから、苦しい。

「り、凜子」

笑いながら泣く私に、お母さんがオロオロしながら私の名前を呼んだ。

毛糸を強く握りしめていたらしく、ほろりと糸がほどけた。<sup>⑥</sup>きれいに巻いて整えられていたものが、崩れていく。

まるで、私みたいにか。

なにが大丈夫なのか。

違う、私は大丈夫なんだ。

この町はきらいじゃない。海を見るのは好きだし、潮風も、ちよつとべとつくし寒いけれど心地がいい。友だちを作ろうとして失敗したけれど、自己嫌悪にも陥るけれど、でも、私はけつして苦しくもなければ悲しくもない。

「私は本当に、大丈夫なんだよ」

それを、何度も言わなくちゃいけないことが、苦しい。

「友だちがいなくても——いいんだよ、私」

どうして信じてくれないのだろう。

へ 中略4

「お姉ちゃん……」

「……え、あー、いや、いいかな、私は」  
へらりと笑って断ると、お母さんが眉を下げる。

前にも見た、神妙な顔つきだ。

「凜子の友だちは、編み物やってたりしないの？」

「え、あーどうかかな」

「お姉ちゃんみたいな中学生はこんなしないんじゃない？」

言葉を濁していると、爽子が素っ気なく言う。助けてくれたのだろう。

「うん、そうだと思う」

同意してこくこくと首を上下に振るけれど、お母さんの表情はかわらなかつた。

冷や汗が流れる。

だめだ、と直感が働く。この場をはやく立ち去らなくちゃいけない。

「凜子、学校楽しい？」

楽しいよ。

そう答えたのにな、うまく言葉が喉を通らなかつた。だから「うん」と言葉ではなく喉で返事をして、笑みを顔に貼りつける。

——なんで私は、笑っているのだろう。

脳裏に和久井くんが現れる。笑っている。けれど、傷ついている。

楽しいの？ と私は和久井くんに聞いた。楽しくないのになんで笑うのかと、そう言った気がする。

じゃあ、今の私は？

「さつき、海の近くにいたわよね、凜子」

不安そうな顔つきで問いかけられ、背中が凍りつく。水の壁に押しつけられたみたいに背筋が伸びてしまう。

阪城くんたちと一緒にいたのを見られたのだろうか。スーパーに行ったときに、近くを通り過ぎたのかもしれない。ちっとも気づかなかつた。

「近所のひとが、最近凜子がいつも海でひとりで行って、言っていたんだけど。ときどき、派手な男の子と一緒に」

誰が見ていたのか、なんで知られているのか。

この町のウワサは私の想像以上だ。どこから誰かが見ているのだろう。かといって、私はやましいことをしたことはない。

ただ、海を見つめていただけ。ひとりで過ごす場所を探していただけ。ただ、となりに和久井くんがいて、ぼつぼつと他愛のない会話をしただけ。

それだけなのに、どうしてお母さんはそんなふうに関心する顔をするのだろうか。

頭上から、爽子の声が聞こえてきたけれど、涙でぐちゃぐちゃになった顔を上げることができなかつた。止めどなくあふれる涙のせいで、目を開けることすらできない。

そういうえば、家族の前で泣いたのはいつぶりだろう。

「お姉ちゃんは、友だちなんかいないんじゃないの？」

爽子の声が震えている。

きつと、どうしようもない姉だと思っっているだろう。怒りとはどこか違う低い爽子の声には、戸惑いが含まれていた。

涙をすすつてから、言われた言葉を反芻する。

——「友だちなんか、いないんじゃないの？」

いらない、と思う。

それは、友だちが作れないから、だ。

もし、私が爽子のように明るく社交的で、誰に対しても物怖じせず接することができるのなら、私に簡単に友だちが作れたならば……私は友だちと過ごしていたはずだ。

「いらない、じゃない」

小さく頭を振る。

「できないから、あきらめた、だけ」

友だちと一緒にいるのが楽しいと感じることができると性格ならば、無理することなく仲良くなれる性格だったなら、あきらめたりはしなかつた。

「そんなの、あたし知らない！」

爽子が声を荒らげると、すぐにお母さんが「やめなさい」と爽子を諷める。

お母さんのその声は、私のウソに安堵したときのものより、胸に突き刺さつた。

爽子の言おうとしている言葉が私を傷つけることだと、そう思われていることが、恥ずかしかつた。

「あたし、知らなかつたんだもん！ お母さんだって、お父さんだって！」

「いいから、そんなことはどうでもいいの」

瞼をぎゅゅと閉じて、ふたりの声を聞く。

爽子が怒るのは当然だ。

今まで私は、大丈夫、としか答えていなかった。できないことを隠していた。

ひとりで行っているのは平気だ。これはウソじゃない。

でも、私はひとりで行うこと、しかできないのだと、知られたくなかつたんだ。

「あたしは、お姉ちゃんは自分でひとりを選んでるんだって、今までずっと、そう



思ってたんだもん！」

叫び声が、リビングに響く。

「友だちを作ろうと思えば作れるくせに。なのにひとりでいるから、そのせいであたまで引越したことにしたから、だから！」

爽子の声に耳を傾け、そしてやっと私の視界が開けてきた。目の前に、爽子の足がある。そして、ぼたと床に雨が降ってきた。

いや、雨が降るはずがない。今わたしがいるのは、屋根のある家の中だ。

「……だって、あたしはお姉ちゃんみたいに、強くないんだもん」

ぼたんぼたと、苦しそうな声とともに、雫が床に落ちて小さな小さな水たまりを作る。

ゆっくりと顔を上げると、爽子が涙を流しながら私を見下ろしていた。

「あたしは、ひとりでいたくない」

ぎゅうっと服をつかんでいる爽子の手に、自分の手をのぼす。妹の私よりも小さな手は、石のようにかたかった。

「友だちがいない学校なんて、いやだ。こわい、無理、絶対やだ。あたしはお姉ちゃんと違って、弱いんだもん」

爽子にはいつも友だちがいた。

私と違って、楽しそうにたくさんの子と笑っている姿を見たことがある。習い事に行ってもすぐに友だちを作り、どこに出かけるのも楽しそうにしていた。

「なんで、爽子がそんなふうに、思うの」

「だってあたしは友だちがいないと不安なんだもん。お姉ちゃんみたいに強くなりたけれど、あたしには無理なんだもん」

私は、私にできないことを簡単にできてしまう爽子が羨しかった。

爽子のようになれたらいいのに、と何度も思った。そうであれば、こんなにお母さんやお父さんに心配をかけることもなかった。ウソをつく必要もなかった。

なのに爽子はどうして、私みたいになりたいだなんて言うの。

爽子は、腫いっぱいに涙を溜めて声を絞り出している。

「友だちがいないなんて、こわい」

引越したことを、爽子は怒っていた。それを私は当然だと思っていた。

でも、私は、友だちと離ればなれになる。から怒っていたとばかり思っていた。

「誰とも仲良くなれなかったら、あたし、ひとりぼっちになっちゃう」

問1 太線部 a 「上辺」・b 「目頭」の読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「誰もいなくなると、自分の居場所がなくなってしまう」と凜子が感じる理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲の人に孤立していると思われるのが恥ずかしいから。

イ それまで一緒にいる人が昼食場所を探してくれていたから。

ウ 単独行動をしていることを誰かに心配されるのを避けたいから。

エ 今では交友関係のために誰かと無理に一緒にいる必要はないから。

問3 傍線部②「手持ち」とは「することがなくて退屈なこと」という意味の表現です。空欄に入る言葉をひらがな三字で答えなさい。

問4 傍線部③「最近は晩ご飯にもあまり魚は出なくなりました」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 本当は魚をきらいではないのに、うそをついてきらいだと言いつづける爽子に、あきれた母親が、彼女の言葉通りに魚を出さないようにしているから。

イ 魚がきらいだと言いつづける爽子の言葉の裏に、この町に引越してきたことへの不満があると感じた母親が、気を遣って魚を出さないようにしているから。

ウ 子どもに人気のない魚がお弁当に入っていると、爽子が友人にからかわれるかもしれないと思った母親が、家でも魚を出さないようにしているから。

エ 晩ご飯に魚を出すと、それをきっかけに爽子が凜子に引越しの文句を言いだすと感じた母親が、けんかの種になる魚を出さないようにしているから。

そうじゃなかった。

友だちと離れて、ひとりになる。ことに、不安を感じていたんだ。

お母さんも私と同じ気持ちだったのか、目を丸くして驚いてから、みるみるうちに顔を歪ませる。

爽子ならすぐに友だちができると、そう思っていた。

友だちができるまで、爽子が不安を怒りで隠していたことに、私もお母さんも気づかなかった。

爽子の手を両手で包み込むと、妹は私に引かれるように床に膝をつく。ほんの少しの力で、へなへなと崩れるみたいに爽子が私の肩に頭をのせた。

「なんでお姉ちゃんは、そんなに強くないの……」

頭上から、大きな岩が降ってきたみたいな衝撃に、脳がぐわんぐわんと揺れる。私は、今まで爽子のことを、どう思っていた？

爽子の気持ちを、どう解釈していた？

爽子は——ずっと、我慢していたんだ。

泣きたいほど不安な気持ちを、怒ることで隠していたんだ。

いくら今までも誰にでも仲良くなったとはいえ、引越した先でも同じように仲のいい友だちができるかは、わからない。そんなの当たり前だ。

知っているひとのいない場所に放り出されて、爽子はずっと心細さを抱いていたのだろう。

編み物を練習しはじめたのも、この町の友だちもずっと親しくなるためだ。

新しい環境でも、爽子にはすぐに友だちができたんだと思っていた。それは、爽子が明るい性格だからだと思っていた。

それは違った。爽子が、友だちを作ろうと、行動していたからだ。

「爽子は弱くない。弱くないよ。すごく、強いよ」

ひとりでいたくないから、友だちを作った爽子の、どこが弱い。

爽子をぎゅっと抱きしめる。

顔を上げると、お母さんが静かに頬をぬらしていた。

家の中にいる三人が、みんなそれぞれ、泣いている。

耐えていたものをせき止められなくなった今この瞬間までずっと、私も、爽子も——

そしてお母さんもお父さんも、みんな、お互いの気持ちを理解していなかった。

それに気づくと、涙腺が崩壊して、声を出して泣いた。

(櫻井いよ著『世界は』「で沈んでいく」より)

問5 傍線部④「沈んでいく」における凜子の心情を説明したものとして当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友人がいないことを心配して気を回す両親に対し、ありがたく思うと同時に自分のことを理解してくれていないと感じている。

イ クラスメイトと自分との間で意見や感じ方が違うことを初めて意識し、それによって生じるやり場のない気持ちに戸惑っている。

ウ 新しい学校では友だちを作ろうとがんばったが、みんなが当たり前でできていることが自分にはできず余計に孤独感を覚えている。

エ 自分はいつとも学校で友だち付き合いがうまくいかないので、新しい学校でもすぐに友だちを作ることができず爽子に嫉妬している。

問6 空欄Aに入る言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 重い イ 硬い ウ 黒い エ 冷たい

問7 傍線部⑤「廊下で足をすくめて立っていた」ときの凜子の様子として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ひとりであることを自分で選んでいるつもりだったが、そうではなく友達が作れないからひとりなのだとこのことを妹の言葉で初めて自覚し、ぼう然としている。

イ 自分がひとりで過ごしているのを妹に知られていると分かり、一番知られなかった母親もそれをウワサで聞いているかもしれないと思い、ショックを受けている。

ウ うそをついていたことに怒っているながらも自らの感情を抑えるような話し方をする妹の迫力に圧倒され、まだ他にも何か知られているかもしれないと恐怖を感じている。

エ ひとりで過ごしているという秘密が実は妹に知られていたことに驚き、これまでずっと隠し通せていると思っていたことが恥ずかしくなり、姉として情けなく思っている。

問8 次は、傍線部⑥「きれいに巻いて整えられていたものが、崩れていく」について説明した文章です。空欄に入る最も適切な表現を、Iは本文中から抜き出して答え、IIは後のア～エから選んで記号で答えなさい。

傍線部⑥では、凧子が手にしていた毛糸玉の描写を通して凧子の気持ちを表現していると考えられる。凧子は家族に対して「I」と言うことで、きれいに巻かれた毛糸玉のように自分はIIと取り繕ってきた。しかし、家族には隠していた話を母親から聞かされることにより、凧子は自分のついできたウソのほころびを感じて動揺しているのである。

- ア この町に来て自分らしく落ち着いて過ごさせている
- イ 周囲からウワサを流されないように生活している
- ウ 爽子とのわだかまりが解消され仲良く暮らしている
- エ 孤立せず友だちを作って周囲になじんで過ごしている

問9 次は、傍線部⑦中の「お互いの気持ち」について説明した文章です。後の問いに答えなさい。

爽子は、凧子をAという点で強いと感じていた。それに対して自分は凧子のようにはなれず、両親が引越を決めたことや、その原因となった凧子を恨んでいた。実際は、凧子はBのであって、Aわけではないのだと知り、これまでの姉に対する認識の誤りを悟った。

一方凧子は、Cことを恨んで爽子が自分にきつい態度を取っていると思っていた。そして、明るい性格のためすぐに友だちができる爽子をうらやましく感じていた。しかし、爽子に友だちがすぐできるのはDの裏返しであり、必死の努力があったことだったと初めて知った。

(1) 空欄A(二か所)に入る最も適切な表現を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 友だちを作る気になればいつでも作れる
- イ 友だちに合わせた行動をとることはない
- ウ 友だちを作れるのに自ら一人を選んでいる
- エ 友だちがいない状況に耐えることができる

(2) 空欄B・Cに入る最も適切な表現を中略4以降の本文中からそれぞれ抜き出し、答えなさい。ただし、Bは八字、Cは十二字で答えること。

(3) 空欄Dに入る言葉を十～十五字で考え、答えなさい。

